

A 新しく物流部門に配属された人や物流会社に就職した人に薦められるようなロジスティクスの入門書がなかなか見当たらない。何かあるだろうか。

B SCMの本としては、やはりエリヤフ・ゴールドラット「ザ・ゴール」(ダイヤモンド社)なのだろう。同じように物流企業の経営本では、「小倉昌男 経営学」(日本経済新聞社)は外せないところだ。

A しかし、両方とも実務にそのまま使えるような内容ではない。

C 入門書として一つ挙げるとすれば、湯浅和夫「物流管理ハンドブック」(PHP研究所)はどうか。湯浅さんの本で一番売れたのは「手にとるようにIT物流が分かる本」(かんき出版)だろうが、タイトルからも分かるように内容はITに偏っている。入門書としては「ハンドブック」のほうが適している。新書判なので持ち歩けるし、値段も税込み一三〇〇円と手頃で、文章も読みやすい。

A 先日、阿保栄司ロジスティクス・マネジメント研究所所長から今年三月に日本語の翻訳が出版されたD.J.パワーソックス・サプライチェーン・ロジスティクス(朝倉書店)を紹介された。パワーソックスと言えばロジスティクスで有名な米ミシガン州立大学の教授で学会の最高権威。原書は米国の大学のロジスティクス学部で代表的な教科書として使用されているらしい。

B しかし税抜きで四八〇〇円は高過ぎるな。文章も読みやすくはない。同書の原書が出たとき、編集長はネット書店で取り寄せたものの結局、資料の山に埋もれたままになっているのを私は知っている。しかも支払いは会社の経費だった。

A 最初は読破する気だったけれど、英語では…。実は阿保先生が同書を薦めた理由は、教科書として優

本誌お薦め「使える物流本」12冊

日本語で書かれたロジスティクスの教科書に決定版はいまだ存在しない。それでも、実用書や先進企業のケーススタディのなかには、実務家の役に立つ名著も少なくない。日頃、本誌編集部スタッフがこっそりと紐解いているロジスティクスの“ネタ本”を紹介する。

本誌編集部

れているというより、米国の大学でロジスティクスをどう教えているかを知るのにちょうどいいということだった。といつても、言い訳にならないか。まあ一回は読んでおいていいはずだが、高いし、とっつきづらいいのは確かだ。

B それよりも一般書籍ではないけれど日本ロジスティクスシステム協会監修「基本ロジスティクス用語辞典」(白桃書房)。あれを読む。私自身、記者の仕事に就いて最初の年にそれをやって随分助かった。

A さすが物流オタク。

C 中田信哉/重田靖男「物流部」(日本能率協会マネジメントセンター)はどうかだろう。物流部の役割をブレイクダウンして細かく羅列してある。他にはないタイプの本で、物流部の仕事を一通り網羅している。それと在庫管理の教科書としては平野裕之「在庫管理の実際」(日本経済新聞社)が分かりやすい。

A 在庫管理の本には、実務には全く使えない“とんでも本”も多いらしいな。私なら勝呂隆男「適正在庫の進め方・求め方」(日刊工業新聞社)を薦める。実務家向けに書かれた本だが、大学の教科書としても使われているそう。また物流ではないけれど、やはり大学の教科書として使われている矢作敏行「現代流通」(有斐閣アルマ)は、日本の流通問題が的確に整理されている。

C 物流を含めたサプライチェーン全体の視野からとらえるにはうってつけだ。

A 教科書ではなくても、例えば「かんぱん方式」の本などはどうかだろう。

C トヨタ本は大野耐一「トヨタ生産方式」(ダイヤモンド社)に尽きる。しかし、普通の人がこの本を読んでもトヨタ生産方式を本当に理解できるかと言えば疑問だ。文章自体は読みやすいし、難しいことが書いてあ



湯浅和夫
「物流管理ハンドブック」
(PHP研究所)
税込み1300円

本誌の読者にはお馴染みの湯浅節をコンパクトにまとめたハンドブック。新書サイズで内容もテーマ別に完結しているため、通読しなくても、デスクに常備して必要になった箇所だけ読むという使い方ができる。



小倉昌男
「小倉昌男 経営学」
(日本経済新聞社)
税込み1470円

「宅急便」の生みの親であるヤマト運輸の小倉昌男氏が自らの経営経験を振り返った回顧録。そこで披露された小倉氏の経営哲学と実践能力は物流業界のみならず、広く産業界全般から支持を得ている。



エリヤフ・ゴールドラット
「ザ・ゴール」
(ダイヤモンド社)
税込み1680円

世界中でベストセラーとなったSCMのバイブル。サプライチェーン上の最も弱いプロセスを制約として、制約に集中して改善を行うことで全体の生産性を向上させようとする「制約理論」はここから始まった。



中田信哉 / 重田靖男著
「物流部」
(日本能率協会マネジメントセンター)
税込み1575円

神奈川大学で物流論の教鞭を執る中田教授と資生堂の物流部門責任者として活躍した重田氏の二人が、物流部の仕事とその役割を解説。物流部門の仕事の概要を知るのがに便利。



日本ロジスティクスシステム協会監修
「基本ロジスティクス用語辞典」
(白桃書房)
定価2730円

市販本としては日本で恐らく唯一のロジスティクス専門用語辞典。97年に初版が発行されて現在は第2版が販売されている。編集委員長は北沢博前長野大学学長。



D.J.パワーソックスほか
「サプライチェーン・ロジスティクス」(朝倉書店)
税込み5040円

現在、米国の大学で使用されている最も代表的な教科書の一つ。原書が大著であるため、翻訳版では割愛されている章もあるが、日本語で読めるロジスティクスの教科書としては貴重。



矢作敏行
「現代流通」
(有斐閣アルマ)
税込み2100円

大学の専門課程および大学院下級生向けに書かれた流通論の教科書。豊富な事例を引きながら、日本市場の流通を詳しく解説すると同時に、流通理論を体系的に理解することができる。



勝呂隆男
「適正在庫の進め方・求め方」
(日刊工業新聞社)
税込み1995円

実務家のほとんどが在庫理論を信用していないし、使ってもいない。その理由を解説し、実務に耐える適正在庫の計算方法を提案している。一部の大学では在庫理論の教科書としても使用されている。



平野裕之
「在庫管理の実際」
(日本経済新聞社)
税込み872円

トヨタ生産方式、なかでもITに関する本を50冊以上書いている平野氏の入門本。在庫管理理論のほか、なぜ在庫が悪いのかなどを平易に解説している。



山崎康司
「P&Gに見るECR革命」
(ダイヤモンド社)
税込み1890円

著者はコンサルタントとして米P&Gに深く食い込んだいわばインサイダー。ECRというバクサイコンセプトを抽象論に陥ることなく、実際の業務に落とし込んだ形で分かりやすく解説している。



山田日登志
「ムダとり」
(幻冬舎)
税込み1400円

トヨタの大野耐一氏に直接、師事したコンサルタントの本。トヨタ生産方式の考え方や、具体的に現場で何をやるかがよく分かる。右の「トヨタ生産方式」と併読するといい。



大野耐一
「トヨタ生産方式」
(ダイヤモンド社)
税込み1470円

著者は日本が世界に誇るトヨタ生産方式の生みの親とされる伝説的エンジニア。副題は「脱規模の経営をめざして」。1978年の初版発行から現在まで、色あせることなく読み継がれているバイブル。

るわけではないが、あまりにも特殊な世界の話なので頭にすんなりとは入らない。実際、数あるトヨタ本のほとんどは、「トヨタ生産方式」の解説書が副読本のよくなものだ。

A 解説書の中でお勧めは？

C 最近のものでは山田日登志「ムダとり」(幻冬舎)が売れているようだ。またトヨタ以外でも、例えば山崎康司「P&Gに見るECR革命」(ダイヤモンド社)など、先進企業のケーススタディは参考になる。

A ケーススタディ中心の本としては、廃刊になった日経ロジスティクス編集部編の「ロジスティクス経営」(日本経済新聞社)があったが、今は手に入らない。また、かなり古い本になるけれど物流業の経営には、米国市場の規制緩和の影響を分析した野尻俊明「USフレイト・インダストリーズ」(白桃書房)と、物流業をマーケティングの視点からとらえた中田信哉「運輸業のマーケティング」(白桃書房)は名著だ。ところがこれも両方とも絶版らしい。

B 本誌が実際にネタ元として使っているのは、英語だけれど米CLMの「Journal of Business Logistics」。edLのJLJはArmstrong & associates' データはCass Information Systemsだ。な。良く引用もしている。ただし、専門用語を日本語に翻訳する時に使える英和辞典がないので、いつも苦労する。専門辞書も欲しいところだ。

C 結局、書籍だけでは充分ではないので熱心な実務家はツテを頼って先進企業を訪問したり、競合企業の物流部門の人たちと意見交換するなどして勉強しているのが実情のようだ。

A 日本ではロジスティクスの方法論が、まだ確立されていない。いわゆる暗黙知の段階だということなのだ。